

尾高邦雄の軌跡からみる産業社会学の射程とその行方

東京大学大学院 園田薫

1 問題背景

尾高邦雄は日本の社会学における巨人であるにもかかわらず、現在ほとんどその業績が顧みられることはない。近年尾高にスポットが当たるとき、職業の分類に尾高の職業社会学が用いられたり(山本 2015)、ヴェーバー研究者としての側面が注目されていたり(三笥 2007)と、産業社会学の創始者としての尾高が評価されることはほとんどないと言える。その大きな理由を占めるのは、おそらく産業社会学という学問領域それ自体の存続が曖昧になっており、日本の産業社会学を体系的に確立した尾高への関心が薄くなっているからだと推測される。日本の社会学において「産業社会学」という領域だけを扱う学会やジャーナルはなく、多くの場合「労働社会学」と抱き合わせでその関心領域を保持していることも、産業社会学や尾高邦雄に対する関心が集まりにくい一因であると考えられる。

そこで本稿では、日本の産業社会学の始祖たる尾高邦雄の思想的な遍歴を追うなかで、尾高が志向した産業社会学とはどのようなものだったのかを考察し、その現代的な意義を問い直す。この試みを通して、尾高が描いた産業社会学の輪郭が現在どのように変化し、また今後の産業社会学はどのような方向を目指して発展すべきなのかという示唆を提示したい。

2 取り上げる文献と時期

今回の報告では、「産業社会学」という連字符社会学を意識するようになってから、産業社会学という領域を体系的にまとめあげた『産業社会学』(1958)や『産業社会学講義』(1981)に至るまでの文献等を中心に、尾高の思想的な流れを汲み取っていく。川合・吉村(1995)は、尾高の主たる研究領域は大きく(1)社会学論というべき社会学という領域そのものへの関心、(2)職業社会学、(3)SSM調査に代表される社会階層論、(4)産業社会学という4つの領域に分けられると指摘している。この指摘に従い、尾高が社会学という学問分野そのものの理論的な考察や職業社会学という領域から、産業社会学の構築に関心が漸次移行したと考えられる時期を中心に考察を進めていく。具体的には1949年12月の渡米を転換点とし、1950年以降の文献を産業社会学的な関心が芽生えた以降の文献として扱うことで、産業社会学的な試みとは何なのかを分析していくことを本稿の目的とする。

3 尾高の関心の推移と産業社会学

3.1 産業社会学以前

川合・吉村(1995)に沿って尾高の関心が社会学論から職業社会学、社会階層論を経て産業社会学という連字符社会学に行き着くまでの軌跡を追うなかで、産業社会学がどのように出来上がっていったのかを論じていく。尾高の社会学への関心はヴェーバーから始まり、ヴェーバーの『職業としての学問』を経て非ヴェーバー的な職業観の模索という職業社会学へと向かっていく(尾高 1995a)。職業社会学という分野は1940年代の尾高を象徴するものであるが、同様に1940年代は

「社会学論」的な興味も強く保持していた。それは高田と新明の間で行われた「特殊社会学」対「総合社会学」の論争に対する尾高の立場に現れている。尾高は戦後の社会学が他の社会諸科学のなかにどのように位置づけられるのかに関心を寄せており、論争における尾高の立場が明確に物語っている(尾高 1948; 富永 2004)。尾高(1949)は、新明正道の主張する総合社会学としての方向性を批判する一方、高田保馬の主張するような、社会学をその他の社会科学の分野と独立した形で儉約的に「社会」の学問であるべきだとする立場にも批判的であった。社会学は固有の主題をもちながらも、その視点から諸現象を総合的に観察すべきであると結論づける尾高(高田・新明・尾高 1950)は、職業社会学という分野の開拓に留まらない一般社会学を志す野心を持っていた。

3.2 渡米にともなう関心の転換と拡大

しかし職業社会学の整備は意識的に行われていたものの、尾高は初めから体系的な領域社会学の確立までを構想していたわけではなかった。その転換点となるのが1949年12月からの渡米、なかでもハーバードビジネススクールでの体験が大きい。一般社会学を指向した尾高の野心的な試みは、彼の研究の中で産業における人間関係に重心が置かれるに従って影を潜めるようになる。その変化の一端は、社会学評論に投稿した2つの「アメリカ社会学界通信」(尾高 1950a, 1950b)から知ることができる。1950年2月の文書ではパーソンズやシルズとの対話やハーバードでの体験により、アメリカでの社会学が社会心理学や社会人類学などの他分野と「統合」ではなく、「協力」関係を構築していることに気づき感銘を受けた旨を述べている。アメリカでの社会学の実践を目の当たりにし、尾高の興味はむしろ新しい理論構築と社会調査を中心とした実証研究という、いわば理論と実証の両立へと移っていることが述べられている。それから2か月後の文書では、当時アメリカの経済学や心理学にて主流であった産業における人間関係というテーマが学問全体の動向の中心となっていると述べ、同時に社会学が当該分野に巻き込まれていくなかで産業や労働問題を扱う「産業社会学」が形成されつつあることに触れている。また、「今度の旅行では(中略)産業における人間関係の研究一般の現況をうかがうことが第一の目的だった」(尾高 1950b; 110)と述べているように、人間関係論こそが尾高の関心の中心にあることがわかる。

2つの「アメリカ社会学界通信」から、尾高は①社会学における理論と実証の両立と②産業における人間関係に関心の中心に据えたことがわかる。この2点は、(1)社会学領域そのものへの関心と(2)職業社会学の延長にありながら、産業社会学という連字符社会学の彫琢へと繋がる重要な変化であった。尾高はアメリカでの経験を通して、メイヨーやロスリスバーガーなど人間関係論に着目したアメリカの研究者から理論を受容し、自身の実証的な研究と組み合わせるなかで産業社会学という学問分野を創造する方向性へと向かっていく。翌年に尾高(1951)は人事管理やインフォーマルな組織を中心的な議題として「産業のなかの人間関係」に着目しながら、組織で働く人々がどのように外生的な要素に制約されているのかを内面的・主観的に把握していくことこそが、「産業社会学にかぎらず、また社会学一般の研究方針でなければならない」(尾高 1951: 13)と論じている。ヴェーバー的な理解社会学のこだわりを持ちつつ、実証的に人間の行為を内的に把握していくことを産業社会学ないしは社会学一般の根幹として重視していることがわかる。ミクロな行為の理解に対する尾高のこだわりは、その後も産業社会学の要として保持されていく。尾高(1952b)は人事管理において人間関係論が軽視されてきたことを指摘しながら、人間関係的な事実を発見する社会学的研究方法と管理技術として望ましい人間関係の創出を目指す経営学的な視点が異なることを強調している。このように人間関係論を軸としながらも、隣接学問と違った事実の探求を重視する社会学の特殊性を主張し、産業社会学において社会学固有な領域の確立を目指した。

尾高の学問的なターニングポイントとしてアメリカでの経験が重要な位置を占めることは前述の通りだが、それは必ずしも「産業のなかの人間関係」への関心だけではない。「アメリカ社会学界通信」(尾高 1950b)では、日本の社会科学を世界的な学問の水準に引き上げるために、日本の社会学者が積極的に海外の学者と交流を試み、国際的に協調していく必要性を主張している。尾高のこうした危機感は国際社会学会 (ISA) への参加に繋がり、1950 年 9 月に行われた第一回のチュエリッヒ大会への参加を機に尾高は理事会の一員に選出される(尾高 1952a)。理事の選出と同時に、尾高は国際協同研究事業の一環として「社会的成層と移動に関する調査」を国際的に比較可能な形で展開する委託を受けた(尾高・西平 1953)。いわゆる第一回目 SSM 調査の指揮を通し、職業構成を社会構造の一つと捉え、職業構成の変化から社会構造の動態を解明していくマクロ的な問題関心を獲得していった(日本社会学会調査委員会編 1958; 尾高 1953a, 1970, 1995c)。

3.3 産業社会学の学問的周縁

人間関係論と同時に開拓されていったマクロ的な関心によって、産業社会学はミクロな理解社会学だけではなく、社会の構造や日本の特殊性の把握といった範囲までを構想に含める巨大な理論へと少しずつ変化していく。その変化は、1958 年に出版された『産業社会学』が 5 年後に改訂版となった際の追記で確認できる。1958 年版の本書では、産業社会学の見方として「社会を構成している人間の日常の生活実相や生活感情が関心の中心なのである。このような社会学的視点の特質を、われわれは〈人間溯及的〉あるいは〈生活溯及的〉と呼ぶことができる」(尾高 1958: 6)、「このような研究方法は、さらにいいかえれば、人間の集団生活を、人間相互間の人間関係に即して分析することにほかならない」(尾高 1958: 8)と述べており、産業に関わる個人の行為や関係性を理解することに重点がおかれている。産業社会学としての立場表明には、経済学や心理学などの分野との差異化を図り、産業社会学を経験科学として確立するために模索する尾高の野望が見てとれる。一方 1963 年の改訂版では新たに〈産業と社会の相互関連〉という章を設け、「産業と社会の相互関連を、巨視的かつ微視的に、また歴史的視野を持つ国際比較の立場から分析するのが、最近の産業社会学における主要な研究動向となりつつある」(尾高 1963: ii-iii)と述べた上で、その研究動向を紹介しながら自身の理論に組み入れようとする姿勢が見られる。

ミクロな人間関係の分析とマクロな社会構造をつなぐために尾高が着目したのは、日本の産業社会に見られる関係性の在り方が「日本的」なものであるのかを問う試みである。1953 年の『産業における人間関係の科学』では、人間関係のミクロな分析を、綿密な実証的アプローチから、それが「日本的」なものであるという自覚を持ちつつ行うべきであるとし、産業のいかなる領域においてもその日本的特性に注意を怠ってはいけないと主張した(尾高 1953b)。尾高(1961)は産業と社会の相互関連を問う格好の材料として「日本の経営」を挙げ、産業化・近代化のプロセスを普遍的側面と特殊的側面に分けたうえで日本企業の事例を分析すべきだと論じている。こうして尾高は日本企業への関心を強め、企業経営の民主化や集団主義を鍵概念とした日本的経営の存在、労働者の企業・組合に対する帰属意識などを中心に論じてきた(尾高 1965, 1984, 1995d)。

以上の学問的関心の遍歴を経て、尾高の研究は『産業社会学講義』(1981)として体系的にまとめられた。尾高(1981)は、産業社会学の研究領域を 3 つに大別する。①産業組織とそのなかの労働者生活の関連に着目し、組織の諸制度と労働者の行動や意識という 2 側面を問題とする領域、②企業における経営者と従業員の関係など、労使関係を含む組織内の人間関係を対象とする領域、③産業組織・産業関係を含んだ「産業」一般とそれが存在する「社会」との関係に対する社会学的考察の領域である。『産業社会学』(1958)から『産業社会学講義』(1981)に至る最大の変化は、

「産業社会学が人間遍及的視点に立ち、産業組織や産業関係を、それらの背後にある当事者個人々の相互的行動とそれを動機づけているかれらの意識の実態にまで溯りつつとらえるというアプローチをとるからである」（尾高 1981: 11）という記述が端的に示す。つまり、「日本的経営」に関する研究や産業構造の変化を分析に含めることで、労働者の人間遍及的な把握を通してマクロ・メゾレベルでの産業組織や産業関係までを産業社会学の学問対象に組み込んだ点にある。尾高は抱いてきた学問的な関心を産業社会学という包括的な学問領域のなかで統合し、労働者へのミクロな理解社会学的視座からマクロな社会構造までを理論的・実証的につなぐことに産業社会学の意味を見出した。

4 産業社会学の現代的意義

尾高の作り上げた産業社会学とは何かを整理すると、労働者のミクロな心理や人間関係の把握からメゾレベルの組織やマクロレベルの産業構造までを分析の対象としながら、ミクロで実証的な手続きとマクロで理論的な概念までを繋ぐ試みであると言えるだろう。しかし、尾高の産業社会学が現在までそのまま維持されているわけではない。日本社会学の黎明期において産業社会学という連字符社会学を立ち上げた尾高だからこそ、上記の壮大な領域社会学を構想し得たのであり、現在の社会学者が彼の研究をそのまま継続することは至難である。同時に産業社会学と共に拡大を続けてきた「日本的経営」の議論が日本の経済的停滞にもなつて顧みられなくなると、少しずつ人々の関心はミクロな労働社会学的研究へと移っていった。このようにして尾高が目指した産業社会学という領域は、徐々に縮小しながら注目を失っていったと考えられる。

では、尾高の志向した産業社会学の現代的な意味とは何か。本報告では、2つの方向性を提示したい。1点目は、日本で調査された産業社会学の事例を海外のものと比較し、今までの知見が本当に「日本的」であったのかを考えることである。日本的経営が注目を集めなくなったことは、産業社会学の限界を意味しない。日本の産業社会学が意味あるものだったのかは、それを日本特有のものとしてではなく、普遍的な可能性を含むものとして発信することにより明らかになるだろう。

2点目は、上林（2012）も指摘するように、当時では見られなかったグローバル化に伴う多様な変化が既存の知見にどのような変化をもたらすのかを考察することである。様々な側面から侵食するグローバル化が「日本的」な産業社会学をどのように変えるのかという点は、産業社会学の豊富な知見を生かす活路であり、我々が受け継ぐべき問いである。

以上の2点を踏まえると、日本的な雇用慣行を持つ日本企業が1990年代以降の急激なグローバル化の波に晒されるなかで、どのように組織を変化させ、そのなかでの人間関係や意識がどのように変化したのかを問うことは重要な産業社会学的課題であると考えられる。例えば、尾高が発見した日本企業の従業員が持つ企業と組合の二重帰属意識（尾高 1965, 1984）は、労働市場の流動性が高まっている昨今どのように変化したのか。年配者の勤労第一主義が多く見られ、若い層に「仕事もレジャーも精一杯」という考えが多く見られた当時の労働者の意識（1995b）は、必ずしも会社への全面的な帰属が社会的に要請される状況ではなくなった昨今、どのような変化を遂げたのか。日本の大企業で多くの外国人が働く時代が到来したが、日本企業はどのように対応しているのか。時代の変化とともに伝統的な日本企業がもつ雇用慣行は、その特性を変化させたのだろうか。日本企業内で見られる現象が「日本的」なのかを様々な方法で検討し、その性質が普遍的かどうかを国際的に問いかけることが、尾高の目指す産業社会学を現代的に受け継ぐ意味なのではないか。

文献

- 上林千恵子, 2012, 「産業社会学」『日本労働研究雑誌』621: 34-7.
- 川合隆男・吉村治正, 1995, 「社会学史関係資料 尾高邦雄の著作目録」『法學研究——法律・政治・社会』68(7): 77-94.
- 三笥利幸, 2007, 「「没価値性」から「職業社会学」へ——尾高邦雄のヴェーバー受容をめぐって」『現代思想』35(15): 136-56.
- 日本社会学会調査委員会編, 1958, 『日本社会の階層的構造』有斐閣.
- 尾高邦雄, 1948, 『職業と近代社会』要書房.
- , 1949, 『社会学の本質と課題』有斐閣.
- , 1950a, 「アメリカ社会學界通信 (一)」『社会学評論』1(1): 93-6.
- , 1950b, 「アメリカ社会學界通信 (二)」『社会学評論』1(2): 108-15.
- , 1951, 「産業における人間関係の科学」『社会学評論』2(3): 2-13.
- , 1952a, 「國際社会學會パリ會議に出席して」『社会学評論』2(4): 74-102.
- , 1952b, 「産業における人間関係」『教育社会学研究』3: 28-33.
- , 1953a, 『新稿職業社会学』福村書店.
- , 1953b, 『産業における人間関係の科学』有斐閣.
- , 1958, 『産業社会学』ダイヤモンド社.
- , 1961, 「日本の経営——産業社会学の新しいフロント」『社会学評論』12(1): 2-6.
- , 1963, 『改訂版 産業社会学』ダイヤモンド社.
- , 1965, 『日本の経営』中央公論社.
- , 1981, 『産業社会学講義』岩波書店.
- , 1984, 『日本的経営——その神話と現実』中央公論社.
- , 1995a, 『尾高邦雄選集 第一巻 職業社会学』夢窓庵.
- , 1995b, 『尾高邦雄選集 第二巻 仕事への奉仕』夢窓庵.
- , 1995c, 『尾高邦雄選集 第三巻 社会階層と社会移動』夢窓庵.
- , 1995d, 『尾高邦雄選集 第五巻 日本の経営』夢窓庵.
- 尾高邦雄・西平重喜, 1953, 「わが国六大都市の社会的成層と移動」『社会学評論』3(4): 2-51.
- 高田保馬・新明正道・尾高邦雄, 1950, 「社会學に對する私の立場」『社会学評論』1(4): 79-104.
- 富永健一, 2004, 『戦後日本の社会学——一つの同時代学史』東京大学出版会.
- 山本圭三, 2015, 「「理想の仕事像」の変容過程——尾高邦雄の職業社会学的視点をベースに」『経済社会学会年報』37: 145-7.